

ダニエル書9章1-19節 「御心にかなった祈り」

1A 御言葉に動かされた祈り 1-2

2A 罪の告白 3-14

1B 契約を守り、恵みを下さる方 3-4

2B 神の命令と預言者への違反 5-6

3B 神の正義と民の不面目 7-9

4B 律法の呪い 10-12

5B 真理への無関心 13-14

3A 神への嘆願 15-19

1B 神の正義の怒り 15-16

2B 神の名が付けられている聖所 17-19

本文

ダニエル書 9 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、先週でダニエル書 8 章まで来ました。本日は 9 章を見ていきます。いつも午後に一節の学びをして、午前礼拝ではその数節だけを抜粋してお話しています。けれども今朝は、午前でも一節読んでいきたいと思います。9 章 1-19 節を一節ずつ見ていきます。それから午後礼拝に、20-27 節を読んでいきます。ここ 9 章は、ダニエル書のみならず、神の救いのご計画にとって、とても大切な、核になる内容が含まれているからです。前半部分である 1-19 節は、ダニエルの捧げている祈りであります。祈りというのが、いかに偉大なものであるか、力あり、物事を動かすものであるかをダニエルの祈りから知ることができます。

どのような祈りに力があるのでしょうか？使徒ヨハネは、「何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださる(1ヨハネ 5:14)」と言いました。御心にかなった願いをすれば、神は聞いてくださいます。ダニエルはまさに、御心にかなった願いをしている手本のような祈りを捧げています。

1A 御言葉に動かされた祈り 1-2

1 メディヤ族のアハシュエロスの子ダリヨスが、カルデヤ人の国の王となったその元年、2 すなわち、その治世の第一年に、私、ダニエルは、預言者エレミヤにあった主のことばによって、エルサレムの荒廃が終わるまでの年数が七十年であることを、文書によって悟った。

時は、ダリヨスが王になったばかりの元年です。バビロンの王ベルシャツザルが殺されてからダリヨスが王となり、そこでダニエルは大臣になりました。紀元前 538 年であると考えられます。そ

の時、ダニエルはエレミヤの預言を読んでいました。エレミヤは、エルサレムの町がバビロンによって完全に破壊されるまで預言し続け、破壊された後も残されたユダヤ人によって、無理やりエジプトに同行させられました。ですからその巻き物はエジプトにおいて完成したものと思われるが、何らかの形でメディア・ペルシヤの地にいるダニエルの手に渡っていました。エルサレムから逃れた民が、もしかしたらエレミヤ書の一部を持ってきたのかもしれませんが。あるいはバビロンから解放されたエジプトにいた人が、巻き物を持ってきたのかもしれませんが。ダニエルにとってエレミヤは、自分が少年であった時にエルサレムで孤独な預言活動をしていた人として見聞きしていたはずで、この預言者が一体何を語っていたのか、その全貌を知ることができると思って、入手した巻き物をすぐに開いて貪り読んでいたことでしょう。そうしたらここにあるとおり、「エルサレムの荒廃が終わるまでの年数が七十年であること」を知ったのです。

実際の箇所を読んでみましょう。「29:10-14 バビロンに七十年の満ちるころ、わたしはあなたがたを顧み、あなたがたにわたしの幸いな約束を果たして、あなたがたをこの所に帰らせる。わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。…主の御告げ。…それはわざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。あなたがたがわたしを呼び求めて歩き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。わたしはあなたがたに見つけられる。…主の御告げ。…わたしは、あなたがたの捕われ人を帰らせ、わたしがあなたがたを追い散らした先のすべての国々と、すべての場所から、あなたがたを集める。…主の御告げ。…わたしはあなたがたを引いて行った先から、あなたがたをもとの所へ帰らせる。」

ここで大事なのは、七十年の「計画」はあるのですが「呼び求めて歩き、祈るなら」、また「心を尽くして捜し求めるなら」という条件が付いていることです。計画なのですから、自動的に神がそうしてくださるものであると考えてしまいがちです。「神さまがそうするって言うのなら、そうなるのだから、なぜ祈る必要があるの？」と考えるかもしれませんが。けれども、神は、祈りと願いによる積極的な関わりによって初めてその実現を見ることができるという条件を付けておられたのです。チャック・スミス牧師は、「神の計画は必ずその通りになりますが、神の御業は祈りを通して見ることができます。」と言いました。神はご自分のことを行われるのに、私たちの助けを必要としません。しかし、神は私たちをこよなく愛されているので、私たちにそのご計画の中に入って、その御業と栄光を見てほしいと願われています。

ところでこの「七十年」という期間ですが、ダニエルにとって捕囚生活は約68年経っていました。バビロンに捕え移されたのが紀元前605年のことです。七十年後は535年あるいは536年です。今は538年ですから約2年後に成就します。エズラ記によればクロス王の第一年に、彼がユダヤ人に対してエルサレム帰還の布告を出しました。ですから、もう間もなく帰還が始まる動きが出て来るということを彼は悟ったのです。そこで彼は祈りのために、膝をかがめたのです。このようにし

で、ダニエルの祈りが神の約束を聞いて、それによって心を動かされたものであると言ってよいでしょう。ですから、御心にかなった祈りとは何でしょうか？神の御言葉に触発される祈りです。朝に祈ってください、と私はよく勧めますね。それは、聖書の言葉を読んで、それに心が動かされて、そして祈ることができるからです。御言葉にある神のすばらしさ、神のお姿、神のなされていることに心動かされる祈りです。

2A 罪の告白 3-14

1B 契約を守り、恵みを下さる方 3-4

3 そこで私は、顔を神である主に向けて祈り、断食をし、荒布を着、灰をかぶって、願い求めた。

彼は、祈るための心備えをしっかりと整えました。まず、「顔を神である主に向けて」祈ったとあります。そして、「断食を」したとありますが、それは肉を養うこと以上に霊を養う行為です。食べたり、料理を作ることで、一日の多くが割かれてしまいます。それを主に心を向けるために行ないます。そして、「願い求め」ています。はっきりと主からの祈りの答えがあることを期待して、祈り通そうとしています。そしてダニエルは「荒布を着、灰をかぶって」願い求めた、とあります。これは、悲しみや嘆きの思いの表れであり、自分を卑しめる行為です。彼はこれから、主に対して罪を告白する祈りを捧げます。

4 私は、私の神、主に祈り、告白して言った。「ああ、私の主、大いなる恐るべき神。あなたを愛し、あなたの命令を守る者には、契約を守り、恵みを下さる方。

ダニエルの祈りは「呼びかけ」から始まりました。エレミヤ書を読んでいて、ユダヤ人が世界に散らばっているのがまさに神の御言葉の通りに、契約の通りになっていることを悟りました。そして神が世界中から彼らを連れ戻すという約束まで与えておられることを知りました。それで、「ああ、私の主は、なんと恐るべき大いなる方なのでしょう。」と驚いています。このようにして、自分が誰に祈っているかを明確にしました。これが祈りの始めであり基本です。使徒たちが、ユダヤ人の議会でイエスの教えをしてはならないと脅された時に、そのことを聞いた仲間たちは、「主よ。あなたは天と地と海とその中のすべてのものを造られた方です。(使徒 4:24)」と祈り始めました。目の前にある脅しに対して、神は何でもできる方なのだということを、そのように言い表したのです。このようにして、まず神がどのような方なのを言い表すことによって、自分の思いや考えによって神のお姿や働きを暗くしないようにします。

そこで彼は、「あなたを愛し、あなたの命令を守る者には、契約を守り、恵みを下さる方。」と言っています。主が、力に満ちた方だけではなく、真実な方、恵み深い方であることも言い表しています。ダニエルの思いは、エルサレムが荒廃していることでもあります。けれども、彼には信仰がありました。神は契約を守られる方であり、神を愛する者、その命令を守る者には恵みを下さる方であ

ることです。エルサレムが荒廃しているということに対して、「神は不在だ」とも思わなかったし、「神は意地悪している」とも思いませんでした。神が恵み深い方であり、どのような状況にあらうとも、「その恵みはとこしえまで(詩篇 136)」なのだということを知っている人は幸いです。

2B 神の命令と預言者への違反 5-6

5 私たちは罪を犯し、不義をなし、悪を行ない、あなたにそむき、あなたの命令と定めとを離れました。6 私たちはまた、あなたのしもべである預言者たちが御名によって、私たちの王たち、首長たち、先祖たち、および一般の人すべてに語ったことばに、聞き従いませんでした。

ダニエルは、主に呼びかけて、主のお姿を見上げた後に、罪を告白しています。それも、これまでもかと言わんばかりに、あらゆる形で罪を犯していることを、不義をなし、悪を行ない、背き、命令と定めから離れたと言っています。「告白する」というのは、「相手の言っていることに同意する」という意味です。神が、これを行ってはいけないと言われていることについて、「その通りです」というのが告白です。神が罪とするものを罪だとみなすことです。主は慈しみ深い方ですから、罪を言い表す者を赦してください。「1ヨハネ 1:9 もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」私たちは、罪を言い表そうとしない、それを隠そうとします。なぜなら、言い表したなら、赦されることはないと思ってしまうからです。事実、人間の社会では失敗を認めたら、その時から再起不能にさせてしまうような圧力があります。けれども、神は人間とは反対です。神は、憐れみと赦しに豊かな方です。むしろ、罪を言い表すことによってその関係が修復されます。

ダニエルは、エレミヤの預言がふんだんに心の中にあります。6 節に書かれていることは、エレミヤがいつも預言していることでした。あらゆる階層の人々が罪を犯していることを、エレミヤは語っていました。それから、ダニエルは「私たち」という主語にしています。ダニエルが、何か悪いことをした記述は見当たりません。むしろエゼキエルの預言では、ノアとヨブに並んで義人であることが語られています。けれどもダニエルは、自分も入れて「私たち」と言っています。これが執り成しの姿です。ダニエルは、自分自身をユダの民から引き離すことはできなかったのです。神に与えられた愛のゆえに、自分はユダヤ人であり、神の民として選ばれていることから切り離すことができませんでした。エレミヤもそうでした。彼はバビロンに破壊されているエルサレムを見ている時に、まるで自分自身が神の怒りを受けているかのようにして哀歌をうたいました。このように、他人事ではなく自分のことであるかのように執り成します。

3B 神の正義と民の不面目 7-9

7 主よ。正義はあなたのものですが、不面目は私たちのもので、今日あるとおり、ユダの人々、エルサレムの住民のもの、また、あなたが追い散らされたあらゆる国々で、近く、あるいは遠くにいるすべてのイスラエル人のものです。これは、彼らがあなたに逆らった不信の罪のためです。8 主よ。

不面目は、あなたに罪を犯した私たちと私たちの王たち、首長たち、および先祖たちのものです。
9 あわれみと赦しとは、私たちの神、主のもので、これは私たちが神にそむいたからです。

ダニエルは、聖書をしっかりと見ていく中で、はっきりしていることがありました。それは、「神のみが義なる方であり、人はその義の基準に達していない。」ということです。どんなに正しいと思われるような人も、義の基準から遠く離れているというのが、聖書が一貫して示している人間の姿であります。そして慰めは、神はそのことを既に知っておられるということです。神は人が自分で自分を救うことができないから、裁きではなく、恵みと憐れみによって人々を救うことにお決めになりました。ノアの時代の洪水の後に、主は語られました。「創世 8:21 わたしは、決して再び人のゆえに、この地をのろうことをすまい。人の思い計ることは、初めから悪であるからだ。」「ローマ 3:23-24 すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。」

しかし、罪が、不面目が、人を神から引き離しています。「イザヤ 59:1-2 見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。」けれども、こんなことないでしょうか？こちらが手を指し伸ばしているのに、それを相手が拒んでいます。自分が拒んでいることに気づかずに、「なぜ私のところに、あの人は来てくれないのか。」と不満を言っています。自分が拒んでいるのに、相手が拒んでいると摩り替えるのです。このように、私たちは何か不幸なことが起こると、神を非難します。いつもは神のことを認めない人ほど、悪いことについてだけ神の名を口にします。例えば、「地震でこんなにたくさんの方が死んだが、神がこれを許されたのかね。」と言います。つまり、「自分が正しく、神に非があるのだ」という立場です。けれども事実は、「神が正しい方で、不面目は私たち」なのです。

そしてダニエルは再び、この罪が一回性もの、軽々しいものではないことを告白しています。最後にバビロンに捕え移されたユダの民だけではなく、既にアッシリヤに捕え移されていたイスラエル十部族の者たちも含めています。そして、今の時代の者たちだけではなく、イスラエルが古くから、先祖たちから犯していたと告白しています。そして、王たち、首長たちといって、あらゆる社会階級の人たちも罪を犯したと告白しています。ダニエルは、理解していました。バビロン捕囚というのが、神のイスラエルに対するご計画において、ご自分の民に怒りを示されるものとして定められた出来事であることを知っていたのです。

4B 律法の呪い 10-12

10 私たちは、私たちの神、主の御声に聞き従わず、神がそのしもべである預言者たちによって私たちに下さった律法に従って歩みませんでした。11 イスラエル人はみな、あなたの律法を犯して離れ去り、御声に聞き従いませんでした。そこで、神のしもべモーセの律法に書かれているのろい

と誓いが、私たちの上にふりかかりました。私たちが神に罪を犯したからです。12 神は、大きなわざわいを私たちにもたらすと、かつて私たちと、私たちをさばいたさばきつかさたちに対して告げられたみことばを、成就されたのです。エルサレムの上に下ったほどのわざわいは、今まで天下になかったことです。

主は、ご自分がこよなく愛する民を選ばれました。イスラエルです。イスラエルが主なる神の声を聞いて、主を信頼して従うことを願っておられました。「律法」というのは、ヘブル語でトーラ、「教え」という意味です。彼らを教えて、この道に歩みなさいと命じておられたものです。それを主はモーセによって与え、それから数々の預言者がその教えに基づいて、主から言葉を預かり、それを宣べ伝えていました。そして、主はモーセによって、ご自分の教えから離れてしまうなどのようになってしまうのかを予め、伝えておりました。彼らがアブラハムに与えられた約束にしたがって、カナンの地に入る直前に、主に聞き従わないとそこから引き抜かれることを警告しておられたのです。「申命 28:63 かつて主があなたがたをしあわせにし、あなたがたをふやすことを喜ばれたように、主は、あなたがたを滅ぼし、あなたがたを根絶やしにすることを喜ばれよう。あなたがたは、あなたがたは行って行って、所有しようとしている地から引き抜かれる。」紀元前 1400 年頃にモーセが語ったことは、北イスラエルは紀元前 722 年に、南ユダは 586 年に起こりました。

私たちは、「神の怒りの中にある愛の叫び」の声を聞かないといけません。私たちはとかく、何か悪いことが起こることを聞くと、「そんな不吉なことは話さないでください」と耳を塞いでしまう傾向があります。不都合なことは聞きたくないのです。けれども、親が子に、「絶対に赤信号を渡っちゃだめよ。車にひかれるよ。」と警告を受ける時に、「そんな、車にひかれるなんて言わないでよ。」と言いません。それは愛の戒めなのです。同じように、主はこのようなことをするのならば、約束の地から引き抜かれると前もって警告されました。それに聞き従わないので、呪いをもたらされました。しかし、そこには神の泣き叫ぶような声が隠されています。

5B 真理への無関心 13-14

13 このわざわいはすべて、モーセの律法に書かれているように、私たちの上に下りましたが、私たちは、不義から立ち返り、あなたの真理を悟れるよう、私たちの神、主に、お願いもしませんでした。14 主はそのわざわいの見張りをしておられ、それを私たちの上に下しました。私たちの神、主のみわざは、すべて正しいのです。私たちが、御声に聞き従わなかったからです。

ここに、イスラエルの霊的な無関心が書かれています。「私たちは、不義から立ち返り、あなたの真理を悟れるよう、私たちの神、主に、お願いもしませんでした。」主は、これらの災いを下し始められた時に、「わたしのところに立ち返りなさい」という大きな声を挙げておられました。事実、イスラエルとユダが危機に陥っている時に、すなわちアッシリヤとバビロンがそれぞれに迫って来ている時に、預言者を数多く遣わされました。そこには、主ご自身の熱情があります。熱い心と思いが

そこにはあります。ところが、肝心のイスラエル人はそれに応答しなかったのです。祈らなかったのです。預言者イザヤが、「主から、しるしを求めよ。」と言われたのに、王アハズが「私は求めません」と言ったようにです(7:11-12)。

主は、平穏な時よりも、危機の時や、試練や困難の時に多くを語ってくださいます。主は実に、痛みという感覚をも用いられて、大きく語っておられます。何かが起これば、それは主からの注意喚起なのです。C.S.ルイスが、こう言ったことがあります。「私たちが快樂を喜んでいる時に、その良心に嘔いておられる。しかし、痛みの中にいる時は叫んで語っておられる。痛みは、耳の聞こえない世界を呼び覚ます神の拡声器だ。」ここでダニエルが、「主はそのわざわいの見張りをしておられ」というのは、そういうことです。ご自身が下すと言われた災いに対して、強いご自身の思いや意志を込めておられるのです。そこに耳を傾けるならば、大きく神の声が聞こえていたのです。

3A 神への嘆願 15-19

1B 神の正義の怒り 15-16

15 しかし今、私たちの神、主よ、あなたは、力強い御手をもって、あなたの民をエジプトの地から連れ出し、今日あるとおり、あなたの名をあげられました。私たちは罪を犯し、悪を行ないました。

16 主よ。あなたのすべての正義のみわざによって、どうか御怒りと憤りを、あなたの町エルサレム、あなたの聖なる山からおさめてください。私たちの罪と私たちの先祖たちの悪のために、エルサレムとあなたの民が、私たちを取り囲むすべての者のそしりとなっているからです。

「しかし」という言葉から始まっています。罪の告白から、エルサレムについて回復を願っています。今、エルサレムでは神殿は破壊され、そこが廢墟となり、異邦人に踏み荒らされています。それを回復してほしいと願っているのですが、これまで見てきたように彼はそれを当然の権利として主張しませんでした。もっぱら自分たちの罪のためにこのようになっていると言いました。ならば、どうして回復を願うことができるのか？それは神の御名のゆえです。「あなたの名をあげられました」とダニエルは言いました。「あなたの町」「あなたの聖なる山」「あなたの民」と、主ご自身の名のゆえに、エルサレムを治めてくださいと祈っているのです。

同時代に、バビロンの捕囚の地でエゼキエルがこの預言を受けました。36章22節からです。「それゆえ、イスラエルの家と言え。神である主はこう仰せられる。イスラエルの家よ。わたしが事を行なうのは、あなたがたのためではなく、あなたがたが行った諸国の民の間であなたがたが汚した、わたしの聖なる名のためである。わたしは、諸国の民の間で汚され、あなたがたが彼らの間で汚したわたしの偉大な名の聖なることを示す。わたしが彼らの目の前であなたがたのうちにわたしの聖なることを示すとき、諸国の民は、わたしが主であることを知ろう。・・神である主の御告げ。・・わたしはあなたがたを諸国の民の間から連れ出し、すべての国々から集め、あなたがたの地に連れて行く。(22-24節)」このように主が祈りを聞いてくださるのは、一方的な憐れみのゆえ

であり主の御名のゆえなのです。これは、神の救いと同じです。神がキリストにあって私たちを選ばれたのは、「恵みの栄光が、ほめたたえられるためです(エペソ 1:6)」と使徒パウロは言いました。主が一方的に恵んでくださって、それゆえに神が行なったことなのだと言った人々がほめたたえるようになるためなのだ、ということです。私たちの祈りが、こうした憐れみに基づくものであることを知っていく必要があります。

ここでダニエルは、出エジプトの出来事を持ち出しています。主が、大きな力を示してエジプトからイスラエルを救い出されました。同じように、エルサレムの解放についてそこを支配している異邦人の力を打ち砕いて、大きな力を示してくださいという願いです。イザヤ書 51 章 9 節以降に、エジプトから救い出してくださいと同じように、シオンに贖われた者が帰ってくるという約束を与えてくださっています。今の時代は、イエス・キリストの復活が私たちにとっての、祈りの根拠です。「エペソ 1:19-20 また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように。神は、その全能の力をキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右の座に着かせて・・」とあります。神がイエス様を死者の中からよみがえらせてくださったその御力によって、この問題を解決してください、この救いを行なってください、癒しを行なってください、と祈ることができます。

2B 神の名が付けられている聖所 17-19

17 私たちの神よ。今、あなたのしもべの祈りと願いとを聞き入れ、主ご自身のために、御顔の光を、あなたの荒れ果てた聖所に輝かせてください。18 私の神よ。耳を傾けて聞いてください。目を開いて私たちの荒れすさんださまと、あなたの御名がつけられている町をご覧ください。私たちが御前に伏して願いをささげるのは、私たちの正しい行ないによるのではなく、あなたの大いなるあわれみによるのです。19 主よ。聞いてください。主よ。お赦してください。主よ。心に留めて行なってください。私の神よ。あなたご自身のために遅らせないでください。あなたの町と民とには、あなたの名がつけられているからです。」

ダニエルは、最後に切実な嘆願を主に捧げています。3 節に「願い求めた」と書いてありました。「願いを聞き入れてください」「御顔を輝かせてください」「耳を傾けてください」「目を向けてください」「心を留めてください」「遅らせないでください」です。それは、主から必ず答えが与えられるということを期待している中で、具体的に嘆願しているのです。イエス様が言われた、「求めなさい、捜しなさい、戸を開きなさい」を思い出しますね。そして、不正の裁判官の譬えを思い出します。人を人とも思わない裁判官であっても、ひっきりなしにやって来るやもめの訴えを聞いたように、ましてや正しい神が、「夜屋神を呼び求めている選民のためにさばきをつけないで、いつまでもそのことを放っておかれることがあるでしょうか。(ルカ 18:7)」とあります。もう七十年が満ちようとしています、この機会が来ているのだから、主が顧みてくださるよう切に願い出ているのです。

そしてダニエルは、「主ご自身のために」「あなたの名がつけられているから」という理由で、エルサレムとその神殿の回復を願っています。主は、モーゼの時からご自身の名を置くところで、礼拝を捧げるようになることを言うておられました(申命 12:5)。そしてソロモンが神殿を建て、もはや移動式の幕屋ではなく、エルサレムにある固定された神殿の場所において、ソロモンは献堂式の時に、こう祈ったのです。「1列王 8:29 そして、この宮、すなわち、あなたが『わたしの名をそこに置く。』と仰せられたこの所に、夜も昼も御目を開いてくださって、あなたのしもべがこの所に向かってささげる祈りを聞いてください。」主がご自分の名を置くというのは、主の栄光、主のご性質がそこではっきりと現れるということでもあります。主はこの宇宙が収めることのできない大きな方です、無限の方です。けれども、主がご自身を現すことをお決めになったのが神殿であります。今の私たちにとっては、まさに聖霊が与えられた信者たちの集まる中に神はご自分を住まいとしておられ、キリストの栄光をお見せになるのです。

その聖所について、「御顔の光を、あなたの荒れ果てた聖所に輝かせてください。」と願っています。この御顔は、主が笑顔で快く受け入れてくださっている顔であります。主の顔があれば、そこには癒しがあります。恵みと平安があります。新しいエルサレムでは、太陽の光がないのに輝いているほど、神と小羊に栄光で輝いていることが教えられています。私たちにも、神は顔を輝かせてくださっています。その暖かいまなざしを、もし私たちが罪によって自ら受けないようにさせているのであれば、どうか悔い改めてください。罪を告白してください。そして、ダニエルと同じようにその祈りが聞かれる体験をしましょう。心洗われ、全てが新しくされたという確信を得ましょう。

『主があなたを祝福し、あなたを守られますように。

主が御顔をあなたに照らし、あなたを恵まれますように。

主が御顔をあなたに向け、あなたに平安を与えられますように。』

(民数記 6:24-26)